

---

# 魔法少女リリカルなのはSplatterS

ハイド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSplatters

### 【Nコード】

N7383L

### 【作者名】

ハイド

### 【あらすじ】

かつて、人と神々が共存していた時代・・・2人の神がいた。

とある事件により、2人の神は戦いを始め、その影響は世界を滅ぼすまでとなった。神々の王により、2人の戦いはお互いの魂を切り離し、仮面に封印する事によって終結した。

しかし、時は流れ、現代。

仮面となった2人の神は、長きにわたる眠りから目覚め、再び、戦いを始めたのだった。

その戦いに巻き込まれ、妹を攫われた少年、平良陸たいらりくは妹を救うべく、

神の魂が封じ込まれた仮面『ヘルマスク』と共に戦う決意をする。  
その戦いが世界を揺るがし、『管理局』も無視できないほど強大な  
ものだと知らずに……。

この小説はリリカルなのはとスプラッターハウスのクロス小説です。

## プロローグ」とある二柱の神の物語」(前書き)

この小説はアニメ、『リリカルなのは』とナムコ(現在バンダイナムコゲームズ)のアクションゲーム、『スプラッターハウス』のクロス小説です。と言っても、主人公はオリジナルですので、ご了承を。

それでは、まずはプロローグです。どうぞ。

## プロローグ「とある二柱の神の物語」

昔々、まだ、世界に龍や、妖精、そして神が人間達と仲良く暮らしていた時代……。ある2人の神様がいました。

一人は、気が優しく力持ちで、いつも人間達に慕われていました。その逞しい豪腕で弱きを助け、強きをくじく勇敢な性格とは裏腹に、子供達に遊んで欲しいと頼まれると、喜んで引き受ける。子供好きな一面もありました。

もう一人は、力持ちなのは一緒なのですが、気が荒く乱暴者で、いつも人間を「神の王様の失敗作」と見下していました。

2人の神様は、お互いの意見と性格の違いから、いつも喧嘩ばかりしていました。といっても、殴り合いの喧嘩ではなく、口喧嘩という軽い物でした。何故なら、2人が殴り合いをしたら世界が滅びてしまうからです。

ある日、気が優しい神様は一人の女の人と恋に落ち、結婚をしました。神様達や竜、妖精、人間達はそんな2人を祝福しましたが、ただ一人、乱暴者の神様はその2人の結婚を面白くなさそうに見ていました。そこから、運命の歯車が狂ってしまいます。

気の優しい神様と女の人が結婚して2ヶ月が過ぎたある日、乱暴者の神様は気の優しい神様がいない間に、その神様の家に行き、その女の人に「見せたいものがある」と言って、崖に呼び出しました。驚かそうと思い、突き飛ばしたのですが、力の加減を間違え、女の人を崖に落とし、殺してしまいました。

その事を知った、気が優しい神様は怒り狂い、乱暴者の神様の所へ怒鳴り込んでいき、とうとう、2人の神々による殴り合いの喧嘩が始まってしまいました。

世界中の人々は、それを知り、震え上がり、神々は二人をいさめようと、喧嘩を止めようとしますが2人は全く止まることを知りません。やがて、2人の喧嘩により、海は荒れ、大地は崩れ、今正に





## プロローグ」とある二柱の神の物語」(後書き)

前々から『リリカルなのは』のクロス小説が書きたかったのですが、何をクロスさせようかと思い、YouTubeでたまたま目にとまった『スプラッターハウス』のプレイ動画が目に入り、何を血迷ったのかこれをクロスさせてしまいました。(汗)まあ、前々から本格的なバイオレンスものを書きたかったので……。

多分これも不定期連載になると思うので温かい目で見守っていてください。

それでは(owo)ノシ

## オリジナル登場人物紹介（前書き）

今回は物語に登場する主要オリキャラを紹介します。  
それではどうぞ。

## オリジナル登場人物紹介

平良陸

性別：男

年齢：19

聖祥大学で超心理学を学ぶ青年。明るく前向きな性格で正義感が強い。

考古学者の父を持ち、父がいつも遺跡の発掘の仕事で忙しいので、彼がバイトをして平良家の家計を助けている。（ちなみに母親は彼が幼い時、妹を生んで他界、父を含めて妹との三人暮らしである）  
『エースオブエース』こと高町なのは、『金色夜叉』、フェイト・T・ハラオウンとは聖祥大付属の小、中、高ともにクラスが一緒の仲。『夜天の王』こと八神はやてとは幼なじみである。ちなみに顔は『マジンガーズ』に出てくる主人公、兜甲児に似ている。

平良真紀

性別：女

年齢：10

聖祥大付属小学校に通う陸の妹。

兄と違い引つ込み思案な性格だが、時折暴走する兄を諫めるなどしつかりものの一面もある。生まれてすぐに母親を亡くしているため、母親の顔を知らない。そのためか兄の幼馴染みであるはやてに甘えたりする。髪の毛は肩まで伸ばしている。

ヘルマスク

性別：不明

年齢：不明

大昔の神の魂が宿った謎の仮面。とある遺跡で平良陸の父親に発掘される。見た目は『13日の金曜日』に登場する殺人鬼ジェイソン・

ボービーズ愛用のホツケーマスクに似ている。

イビルマスク

性別：不明

年齢：不明

とある異世界の塔に祀られていた謎の仮面。ヘルマスク同様に大昔の神の魂が宿っている。落雷と共に塔から現れ、何処へと去って行った。見た目はどくろが笑ったような感じで気味が悪い。

## オリジナル登場人物紹介（後書き）

次回から本格的な物語が始まります。楽しみに待っていてください  
ね。

## チャプター1「始まり」(前書き)

今回、本格的に物語が始まります。相変わらずのグダグダっぷりですが、暖かい目をお願いしますね。

陸「魔法少女リリカルなのはSplatters、始まるぜ」

## チャプター1「始まり」

ここは潮の香りが漂う町、海鳴市。

「やっべ！遅刻だ、遅刻！ほら真紀、急がねーと遅刻するぞ！」

「うっ、まっつてよ、陸兄ちゃん」

アパート『べらぼう荘』で兄妹らしき2人の男女が食パンをくわえ、全速力で走っている。どうやら学校に向かうようだ。

この青年の名は平良陸<sup>たいらりく</sup>、聖祥大学で超心理学を学ぶ大学生、母親は彼が小さいときに亡くなっており、父親は考古学者で各地の遺跡を調査し家にいない。その為、妹である平良真紀<sup>たいらまき</sup>と2人きりで生活をしている。家計は、陸がバイトをして生計を立てている。時折、父親からの仕送りが来るが、2か月後に来たり、最悪の場合、半年以上も来ない事もあるので信用できない。その為、バイトで金を稼いでいるのである。ちなみに陸がバイトをしているのは翠屋という喫茶店である。

聖祥大学に到着、どうやら間に合ったようである。ちなみに、聖祥大学には小学校、中学校、高校が付属しており、陸もここで、小中、高を過ごしたのである。

「ふー、ギリギリセーフ。んじゃ、兄ちゃんも学校頑張るから真紀も頑張ってこいよ」

「うん！」

そう言っつて、陸は大学へ、真紀は小学校の方へ向かうのだった。

それから、結構な時間が経って放課後。

「終わった終わった。あ、お兄ちゃん」

授業が終わり、校門を出た真紀は陸の姿を目にし、一目散に駆け寄る。

「お？真紀か。今日はお兄ちゃんバイト休みだから一緒に帰ろうな」

「え？・・・うん！」

いつもならバイトがある為、一緒には帰れないのだが、今日はバイトが休みと聞き、真紀は顔を輝かせ嬉しそうにうなずく、そして手をつないでべらぼう荘へと帰った。

べらぼう荘へと帰宅をし、ふと、真紀は自分の家の前に何者かがいるのを見つける。若い眼鏡をかけスーツを着た、40前後の男だった。

「お兄ちゃん。あれ、お父さんじゃない？」

「あ、ホントだ。親父ー」

「ん？おお、陸と真紀じゃないか。元気にしてたか？」

陸の声に振り向いた男は顔をほころばせ、2人を抱きしめる。この男の名は平良昌造<sup>たいらしょうぞう</sup>。考古学者であり、陸と真紀の父親でもある。

「よせつて、俺はもう19だぜ。っていうか、仕事はどうしたんだよ？」

「仕事は早く終わったんでね、予定より早く帰ってきた。そうそう。お前にお土産を渡そう」

「そう言つて昌造は古びた仮面を陸に渡す。

「何だこれ？ホッケーマスクみたいだけど？」

陸はそれをしげしげと眺め感想を漏らす。

「それは遺跡で見つけたんだ。地元の人の話と文献によると、その仮面には特別な力があって、昔のえらい人がこれを被った途端に不思議な力を身につけたそうだ。もしかしたらお守りに使えるかもしれないぞ」

「ふーん・・・被った途端に力がねえ・・・」

「そう呟き、じつ・・・と見つめると。

ボウ・・・

「かすかだが、仮面が赤く光る。」

「ん？」

それを見た陸は目を瞬かせ、目をこすつてもう一度見つめる。だ

が、再び仮面が赤く光る事はない。

「（気の所為だな・・・）サンキュ、親父。こいつはこの家のお守りに使わせてもらうぜ」

そう言つて陸は仮面をお守りとしてバッグに入れた。父が帰つてきたその日に食べた夕飯が格別に美味しく、楽しいものだった。

この時、誰も想像していなかった。この日、陸が仮面を受け取らなければ・・・昌造が仮面を掘り起こさねば、あんな事にはならなかつただろう・・・、この日を境に陸と真紀の運命が狂つてしまうなどと、誰も知る由は無かつた。

翌日・・・

その日の夜、翠屋は記録的な大繁盛で忙しく、しばらくは終わりがそうになかつた。

「陸君。後は僕達で何とかするから、君はもう上がっていいよ」

「いえ、いいですよ。結構忙しそうですし。人手が足りませんよ。

それに親父がいますから」

店主の高町士朗たかまち しろうが陸に上がるように言うが、陸は父親が妹の子守りをしているからまだ続けると言う。そこへ・・・、

「陸！たいへんだ！」

士朗の息子である高町恭也たかまち きょうやが急いで駆け込んできた。

「どうしたんだ、恭也？そんなに慌てて」

「ちよつと窓から外を見ていたら、陸の家の方に煙が昇つてて・・・」

「！？士朗さん。俺ちよつと様子見てきます！」

恭也の言葉に陸の顔が驚愕へと変わり、士朗に一言断つて、翠屋を飛び出した。

「恭也さんの勘違いであつてくれ・・・頼む！」

そう考え、一心不乱にべらぼう荘へと走る。最悪の自体でないこ

とを祈り、たどりついた陸が目にしたのは、大勢の人ばかりと、真っ赤に燃え盛るべらぼう荘であった。

すぐさま、陸は近くにいた消防隊員に聞く。

「すみません！生存者は！？」

「今、消防隊員が中で救助活動をしている。とりあえず落ち着くんだ」

「これが落ち着いていられますか！？中には妹と父がいるんです！ちよつと見てきます！」

「あつ！待て！」

消防隊員が止めようとするのも聞かず、陸は水をかぶり、炎に包まれたべらぼう荘へと足を運んだ。

「何だよ・・・これ」

べらぼう荘の中に足を踏み入れた陸は中の光景を見て絶句する。

見渡す限りの血。そして物言わぬべらぼう荘の住人や救助に入った消防隊員だった『モノ』がそこに転がっていた。

「おえつ・・・」

そのつぶされ、引き裂かれた死体とそれから放たれる死臭に思わず、陸は嘔吐した。一体、どうやったらこんな死体になるのだろう。そう考えていると、部屋のドアが開け放たれ何かが姿を現す。

「ケケケケケケ・・・」

それは異形の存在だった。全身の皮膚は腐ったような色をし、口もない、耳もない。男か女かすらも分からない。ただ、顔についてるのは爛々と輝く赤い目玉であった。

「な・・・なんだよこれ」

「ゲゲゲゲゲゲ・・・」

「シュシュシュシュ・・・」

「あ・・・集まってきた！？」

そう呟いていると、その異形がぞろぞろと集まってくる。怖い、怖い、こわい、コワイ！陸の思考は恐怖で塗りつぶされ、後ずさりをする。早く逃げなければこの化け物共に殺される。そう考えたそ

の時、

・お兄ちゃん・・・

一瞬、真紀の笑顔が脳裏をよぎる。自分がここで逃げたせば、真紀が危ない。自分が守らなければ・・・。

『陸・・・、真紀をお願いね・・・。守ってね』

陸の脳裏に幼いころ、真紀を生んで死んだ母親の言葉がよみがえった。陸は勇気を振り絞り、落ちてあつた角材を拾う。そして、

「退けエエエエエエエエエエエエエエツ!!!」

雄たけびを上げ、異形達を殴り、押しのける。だが、大したダメージにはならず、すぐに起き上がると、陸を追いかける。だが、異形を倒すのが目的ではない。真紀と父親を助け、ここを脱出する。それが陸の目的だったのだ。やがて、自分と真紀が住んでいた部屋の前に立つ。

「真紀ッ!」

陸はそう叫び、ドアを蹴破る。だが、そこには真紀の姿はおらず、血まみれの昌造の姿があつた。

「親父!」

陸は、昌造に近づき、抱き起した。かすかだが、息をしている。

早く病院に連れて行かないと・・・。

「り・・・陸か?」

「親父!大丈夫か!?!」

昌造が目を開け、陸は安堵の息を付く。だが、

「陸・・・すまない。真紀が連れて行かれた・・・。私がいながら・・・」

「何だつて!?!」

昌造の口から語られた衝撃の事実には陸は驚愕の表情となる。早く、父親を病院に連れていかなければ・・・そして、妹が連れ去られたことを警察に言わねば。そう考えていると、

「陸・・・私は・・・もう駄目だ」

「!?!?・・・何言つてんだよ!こんな病院に行ったらすぐ治るっ

て！」

昌造の弱気な一言に陸は怒鳴る。だが、昌造は首を振り、陸に告げる。

「いいや・・・私の体は・・・私が・・・一番・・・よく知っている。奴らの・・・目的は・・・、私が掘り起こした・・・お前のお守りとして持っているあの仮面だ」

「え!？」

陸は怪訝な表情となり、バッグにある仮面を見た。何故この仮面が狙われなければならないのか、不思議でならなかったのだ。

「この仮面は・・・古代の神の魂が・・・宿った・・・物だ。あの化け物は・・・それを狙って・・・私がいるべらぼう荘へと・・・やってきた。おそらく・・・やつらは・・・仮面に宿る魂を悪用するつもりだ・・・」

「ま・・・待ってくれよ！なんで真紀が攫われなきゃいけないんだ!？」

「真紀だけではない・・・べらぼう荘の女性、全員は連れて行かれた」

陸は何故、真紀が連れて行かれなければならないのかを昌造に聞き、その答えに陸は驚愕の色に染まる。陸の脳裏に様々なイメージが浮かぶ。真紀が化け物に連行され、弄ばれ、終いには化け物の繁殖用の奴隷とされる姿が・・・。その時、

「ゴフツ！」

「親父!・・・父さん!」

「フフ・・・、どうやら私も天に召される時が来たようだ・・・。真紀を・・・助けてやってくれ・・・頼んだ・・・ぞ・・・」

昌造は血を吐き、陸に真紀の運命を託すと、息を引き取ったのだ。つた。

「父さん・・・父さアアアアアアアアアアアアアアアん!」

陸の絶叫が響くとともに、ドアから異形達がなだれ込む。異形達は陸を殺さんとじりじりとにじり寄ってくる。べらぼう荘の人たち



仮面はもしかしたら別世界にあるだろうし、他を・・・」

少女は言いかけ、何かの気配を察知し黙る。ガリユーも、女性を連行していた異形の集団も少女の異変に気付き、その視線の先を振り返る。そこには、大男が立っていた。肌から人と分かるが、全身の筋肉が盛り上がっており、上半身の服がはじけ飛んでいた。着ているのは下半身のジーンズとスニーカーのみであり、もつとも特徴的なのは頭に付けられたホツケーマスクのような仮面とスキンヘッドである。そう、この大男は仮面・ヘルマスクと融合した陸だったのだ。

「ギシャアアアアアッ！」

集団の中の異形の一体が陸に飛びかかるが、

「ふん！」

陸はその異形に裏拳を叩きこむ。異形の頭が潰れ脳漿があたりに撒き散らされる。仲間の死に異形達は憤り、陸に飛びかかるうとするが、

「近づくんじゃねえ！ テメエらもこうなりてえか！？」

一喝。すると、ビクツと肩を震わせ、異形達は黙りこくる。それを見た陸は、ガリユーと少女に向き直り、睨む。

「真紀を返せ、トカゲ野郎」

陸の体から放たれる威圧感に少女とガリユーはたじろぐが、ガリユーは真紀を少女に預けると、陸に向かって構えようとする。だが、駄目、この子をドクターに預けるのが最優先

少女に止められ、ガリユーは陸と戦うのをやめ、少女を真紀ごと抱きかかえると、いずこへと飛び去った。

「待ちやがれ！」

陸は叫びながらガリユー達を追おうとするが、行く手を異形達の別働隊に遮られる。

「邪魔するんじゃねえ！」

邪魔をされ、怒った陸は異形達に剛腕を振るう。その度に飛び散る血、内臓、脳漿。またひとつまたひとつ増えていく異形達の死体。

「退けエ！皆殺しにするぞ、オルアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

異形達のかえり血を浴びながら陸は全速力で走る。真紀を連れ去ったあのトカゲ野郎（ガリユーの事だ）と少女を血祭りに上げ、真紀を助け出すために。

だが、すでに遅く、ガリユー達は何かの転移魔法で真紀を連れて行こうとしている。

「逃がすかア！」

そう言つて陸は手を伸ばすが、ひとあし早くに転移が始まり、陸の手が空を切る。

「逃げられたようだな・・・」

「ちきしょう！どうすれば・・・」

ガリユーに逃げられ、陸は悔しさに地面をたたく。その時、ヘルマスクが切りだした。

「我らも転移魔法を使い、彼奴等を追おうぞ」

「魔法つて・・・ファンタジーでもあるまいし・・・」

ヘルマスクの馬鹿げた提案に陸は半眼になってつぶやく。だが、ヘルマスク本人はいたって真面目であった。

「我は神だ。転移魔法ぐらい出来る」

同時に陸の足もとに魔法陣が現れる。

「すげえ・・・これが魔法か？」

と陸は初めての魔法に驚きと喜びの混じった表情で言う。

「左様。転移先は・・・ミッドチルダか。ではいくぞ若者！」

ヘルマスクがそう言つと転移魔法が発動し、陸達はいずこへと消えた。一体、ミッドチルダで陸とヘルマスクを待ちうけるのものは？真紀の行方は一体・・・？まで次回。

Let's go to NEXT STAGE・・・

## チャプター1「始まり」（後書き）

いかがだったでしょうか。

ついに始まった本格バイオレンスストーリー、父を殺され、妹を攫われた主人公が神の魂の宿った仮面と共にミッドチルダを奔走するストーリーです。時列系ではSS開始らへんですね。ちょっと、残虐表現や展開を書くのが少し難しかったです。（汗）

今回は、なのは達が登場します。お楽しみに。

それでは（owo）ノシ

## チャプター2「異世界」(前書き)

今回も陸無双が始まります。ただ、相手がリリなのでおなじみにカプセル型のマシンなのでグロは全くありませんが……。(ネタはれ自重)ちなみに新キャラも出ますよ。

相変わらずのグダグダですが、暖かい目をお願いします。

ジエニファー「魔法少女リリカルなのはSplatters・・・  
始まります」

## チャプター2「異世界」

ミッドチルダ、時空管理局機動六課のオフィス

「はい、はやてちゃん。頼まれた資料、ここに置いておくれ」

「ん？ああ、なのはちゃんありがとな」

六課の隊長、八神はやてのデスクに資料を置く、サイドテールの女性。名は高町なのは。はやての友人である。2人は、この機動六課の中でも屈指の戦闘力を誇る魔導師であり、はやては『夜天の王』、なのはは『エースオブエース』という二つ名を持っている。ふと、なのはははやてが何かを読んでいる事に気づく。

「あ、それ高校の卒業アルバムだね。懐かしいなあ」

「まあな、ちよつと整理したら見つけたんよ」

はやてが持っていたのは聖祥大付属高校の卒業アルバムであった。「そう言えば最近、仕事などで忙しかったし、そういうのを見る暇もなかったね」

「せやなあ、陸君今どうしてるかなあ・・・」

アルバムをパラパラとめくり、卒業生の顔写真のページを開く、そこに写っている陸を見ながらはやてはため息をつく。

「陸君かあ・・・懐かしいな、そう言えば、はやてちゃんって陸君と幼馴染だったんだっけ？そう言えば、私とフェイトちゃんに会う前から一緒にいたんだよね、はやてちゃんと陸君。もしかして、恋人同士とか？」

「え？ええ！？ちやうちやう！ウチと陸君は確かに小さい頃一緒やったけど、そんな関係やないで！」

なのはの言葉にはやては顔を真っ赤にして否定する。

「とか言っちゃって、顔が真っ赤になってるよ？」

「も〜！なのはちゃん、からかわんといて！」

「はやてちゃん、大変です〜！」

なのはとはやてがそんなやり取りをしていると、小さい人形によ

うな少女がオフィスにやってきた。

「ん？どないしたんや、リイン」

「どうしたじゃないですよ！クラナガンの廃墟で次元震が起こったって通報があつたんです」

「なんやて!？」

小さい少女、リインの報告に、はやては驚愕の表情となる。

「はやてちゃん、フェイトちゃんと一緒に調査に行ってくるね」

「ああ、気をつけてな」

その言葉を交わし、なのははオフィスを飛び出して行つた。

その頃・・・ミッドチルダの首都クラナガン郊外の廃墟

「う・・・ここは」

そこで陸は目を覚ました。起き上がり、あたりを見回し、一言。

「なんだここ・・・まるで世紀末じゃねーか」

陸がそういうのも無理はない。散乱した瓦礫、半壊した建物。ところどころに白骨化した死体が転がっている。まさにこの世は世紀末！をそのまま表したような光景であつたからだ。

『うむ、まさに世界は核の炎に包まれたな』

「んなこと言ってる場合かよ・・・ん？」

ヘルマスクのボケにつっこみ、ふと、陸は鏡の破片を見る。するとそこには・・・、ヘルマスクと融合し、変わり果てた自分の姿が。「何だこれ・・・、俺なのか？」

己の姿を見て、愕然とする陸。そして何よりショックだったのは・・・  
「ハゲになつてるウウウウウウウウウウウウウツ!!!」

どういう訳かスキンヘッドになつていいる事である。鏡から目をそらし頭を抱え、絶叫する陸。怒りで見境をなくしてしまつたとはいえ、ヘルマスクと融合してしまつたのを少しだけではあるが後悔した。

『騒ぐな若者、その状態になるのは我と融合している間だけだ。我

が融合を解けば元に戻る』

そんな陸をヘルマスクはいさめ、そして続ける。

『そんな事より、今は奴とお前の妹を探すのが先だ』

「そ、そうだな……。っつーか、探すって言ってもここら辺は人っ子一人いないしなあ……。」

シヨックから立ち直った陸はそう言っつて、あたりを見回す。すると、

『む……。若者よ。北東に生体反応がある。行ってみるか？』

「生体反応まで感知できるなんて、どんだけスゲーんだよ……。」

『当然であろう？ 我は神、この位は当然だ』

陸の言葉に、ヘルマスクは誇らしげに答えた。ああ、そうだと陸はポン、と手をたたき、ヘルマスクに言う。

「所だよ。若者若者っていうの止めてくんね？ 俺には平良陸ってちゃんとした名前があるんだけど……。」

『考えておく』

「OK。んじゃあ北東に向けて出発するぜ、ヘル」

『ヘル？』

「お前の呼び名だよ。ヘルマスクってフルネームで呼ぶのはめんどくさいからな」

『ふん、勝手にしろ』

そんなこんなでヘルマスクことヘルと陸は北東へ向けて歩き出した。

十分後……。北東のダウンタウン

「確かに人がいるけど……。寂れてんなあ〜」

到着した陸は目の前の光景を見てそう呟く。そこは廃墟のビル街で、多くの浮浪者がたむろしている。あたりを見回すが、真紀や彼女を攫ったトカゲ野郎と連れれの少女がいる気配がない。ちなみに陸は未だヘルと融合している。もし、あの2人組がやってきた場合、いつでも応戦できるようにである。



貫きはしなかった。突如、上がった雄たけびと共に、拳がマシンを貫く。

ズボア！

マシンから拳が引き抜かれ、機械類がショートをし、マシンは横に倒れると、動かなくなつた。一体だれが・・・？少女がそう考えていると、

「よお、大丈夫か？」

マシンを破壊したであろう、男が現れた。スキンヘッドで顔にホッケーマスクをかぶり、筋肉が異常に膨れ上がった上半身裸の大男であつた。

「お、おじさん・・・誰？」

「おじ・・・俺はこう見えてもお兄さんだけだな・・・。俺は平良陸。君は？」

オジサン呼びわりされてショックを受けるも、大男こと陸は自己紹介をし、少女に君は誰なのか？と聞く。

「ジェニファー・・・、ジェニファー・ウィルス」

「ジェニファーか・・・、どうしてこんな所に・・・っ!？」

陸は母親はどうしたのかを聞こうとし、ジェニファーの近くにいること切れた母親を見て絶句した。

「ママと一緒に木の実を採りに行こうとしたら、ガジェットに襲われてママが死んじゃつたの・・・。うう・・・うわああああああああああん!!! わああああああああん!!!」

ジェニファーは陸にここにいる訳を話すと母親が死んだ事を思い出して泣いた。恐らく、ガジェットとは先ほど陸が壊したマシンの事だろう。

「わ・・・悪い。いやな事聞いちゃったな。お兄ちゃんもついさっき、父さんが死んじゃつたんだ。だから君の気持ちも痛いほどわかるんだよ」

「ぐすつ・・・」

陸はそういうと、ジェニファーを抱いて、ポンポンと背中を優しく



「す、すごい・・・素手でガジェットを倒すなんて・・・」

その光景を、ジェニファアの他にも見ている人物がいた。なのは彼女の友人、フェイト・Ｔ・ハラオウンである。彼女等は、次元震の調査をしに来たのだが魔力反応とロストロギア反応があったのでこの森に来てみると、ホツケーマスクの大男がガジェットと戦っている光景を目撃した。やがて、ガジェットを倒し終えた大男がなのは達の方を振り向く。いきなり振り向かれ、びっくりするなのとフェイトだったが、管理局員という仕事柄逃げる訳にもいかない。「私達は時空管理局です。武装を解除しておとなしくしなさい！」フェイトが先にデバイスを構え、大男に言うが、大男の方は聞いているのか聞いていないのか黙って首をかしげている。

「ちよつと・・・聞いていゝもしかして・・・お前ら、高町とテストタロツサか？」へ？」

フェイトの言葉を遮って、大男がフェイト達の名を呼ぶ。

「何で私やフェイトちゃんの名前を？」

なのはが大男に自分で自分の名を知っているのかを問う。大男は頭に疑問符を浮かべ、

「やっぱりな。俺だよ俺。やっぱ、この姿じゃわかんないか・・・へル、融合を解いてくれ」

「わかった」

大男は、そう呟くと、何処からともなく声が聞こえ、それと同時に筋肉がしぼみ、スキンヘッドだった頭に髪の毛が生えてくる。大男は中肉中背の男になり、仮面を外した。その素顔はなのは達が見知っている顔であった。

「陸（君）！？」

そう、なのは達の小学からのなじみである平良陸本人だったのだから・・・。

Let's go to NEXT STAGE・・・

チャプター2「異世界」(後書き)

いかがだったでしょうか？

今回登場した、ジエニファアは実は本家スプラッターハウスのヒロインから名前を取りました。容姿はこんな感じですよ。

年齢は7歳

ピンク寄りの赤のストレートの髪の毛。

服装は白いワンピース。

彼女も今後、活躍させるつもりです。彼女の活躍にご期待ください。次回もお楽しみにそれでは(owo)ノシ

### チャプター3「旧友との再会、そして訓練」(前書き)

今回は、フォワードが登場。そして、再び訓練と言う名の陸無双があります。

では相変わらずのグダグダですが、温かい目で応援よろしくお願いします。

スバル&ティアナ&エリオ&キャロ「魔法少女リリカルなのはSP  
latters始まります」  
フリード「キユクルー」

### チャプター3「旧友との再会、そして訓練」

『大変だよ！はやてちゃん！』

「ぬおわ！びつくりしたあ！！！」

起動六課のオフィスでうたた寝をしていたら、突然なのはの念話が大音量で飛び込んできたため、はやては驚いて、デスクから転げ落ちる。しばらくして、なのはからの念話だとわかると、すぐさま起き上がり、応答する。

『どないしたん？なのはちゃん』

『廃墟近くの森で次元震の調査をしてたら、多くの魔力反応とロス・トロギアの反応があつて、それでそれを調べようと思っていたら・・・ガジェットとマスクをつけた巨人さんが戦つてて・・・』

『落ち着きや、なのはちゃん、前置きが長すぎるで。何を慌てとんの？』

慌て口調のなのはを諫め、単刀直入に言うように促す。

『その巨人さんが陸君だったの！』

『え？よう聞こえんやつた。もつかい言つて』

『だから、陸君がその巨人で次元漂流者として来ちゃつたの！』

なのはの言葉に、はやてはポカーンと口を開け、そして・・・

「何やてエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエツ！！！！？」

絶叫したのだった。

一方その頃・・・

上空では、なのはが陸を、フェイトがジェニファーを抱えて飛んでいた。その後を追うようにヘルが飛んでいる。

「成る程なあ・・・ここが別世界。なんか全く実感がないぜ」

陸は腕を組みながらそう言う。ちなみに、なのはからここがミッドチルダという地球とは全く別の世界と言うこと、そして自分自身が次元漂流者という分かり易くいえば世界規模の迷子ということを

知らされている。

「にははは・・・まあ確かに魔法が存在してあること以外は文明は地球と変わらないからね」

苦笑交じりでなのは陸に言う。ちなみにジェニファーは黙ったままフェイトにしがみついている。恐らく、高いところが苦手なのだろう。

「つか・・・俺とジェニファーは何処に連れて行かれるんだ？」

陸は何処に連れて行かれるのか疑問に思いなのは聞く。

「起動六課本部に行くんだよ」

「起動六課？」

聴きなれない単語に、陸は首をかしげる。

「私達の仕事場、陸君は次元漂流者だし、保護をしなきゃならないから。それと私達の後ろを飛んでいるあのロストロギアの事も調べなきゃならないからね」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！俺の話を聞いてなかったのか？！俺は真紀を助けなきゃなんねーんだ。そんな時間なんか無いぞ！」

保護と聞いて、陸の顔が青ざめる。まあ、確かにそうだけど・・・となのはは渋りながら答える。

「真紀ちゃんを助けたい気持ちはわかるけど、犯人の身元や素性が分からないじゃ、むやみに探しても見つからないよ。それに陸君が持っているヘルさんとか言う仮面はロストロギアみたいだし・・・」

「ロストロギアは、危険な代物なんだ。急ぐ気持ちは分かるけど、とりあえず本部に行かないと・・・」

なのはに続いてフェイトの説得により、陸はしぶしぶ、了承する。そんなこんなで、陸は起動六課に向かう事になった。

## 起動六課の取調室

「ふあゝ、退屈だ」

そこで、陸はヘルをシャリオと呼ばれる管理局員に渡し、ジェニ

ファーを連れてここに来たのだが、もう事情聴取の担当者を待つて30分も経過していた。さすがに待ちくたびれ、あくびをする。ジエニファーは陸の膝に座りながらすやすやと寝ていた。さつさとヘルを取り戻して、ここをおさらばし、真紀を助けたいのが本音だが、そんな事したら脱走の罪で指名手配になるとなのは釘を刺されたのでやめておいた。妹を助けるためにミッドチルダに来たのに、指名手配犯にされるのはシャレにならないからである。それにジエニファーの事もある。母親を失った上に自分が今いなくなれば、彼女は一人ぼっちになってしまう。それは避けたい気持ちもあった。眠気覚ましにすっかり冷めたコーヒーをすすする。その時、取調室のドアが開き、担当者が姿を現した。

「ん・・・ブザー！は、はやて！？何でここに!？」

その担当者を見て、陸はコーヒーを思いっきり噴き出す。そう、取り調べ担当者は幼馴染のはやてだったのだ。フェイトやなのはのみならずはやてまで管理局に勤めていた。正に晴天の霹靂であった。「それはこっちのセリフやで、陸君。どうしてここに来たのか。あのロストログアは何なのか。じっくりとお話させてもらうで」

「わかったわかった。頼むからドアップで迫るのは止めてくんね？」ズイツと物凄い形相で迫るはやてを右手で押さえながら陸はここに来た経緯を話した。父親が、怪物に襲われ、殺された事、妹が攫われた事、そして妹を助けるためヘルと融合した事、転移先で、ガジエットに襲われ、母親を殺されたジエニファーと出会った事を。

「そんな・・・叔父さんが、亡くなったんか。ええ人やったのに」陸の父親が死んだ事を聞き、はやては落胆した。小さい頃、陸の父親にはよくしてもらった記憶があったので、そのショックは大きいものだろう。

「まあな、家をよくすっぱかしていたけど良い父親だった・・・」陸はそう言い、遠い目で天井を見上げ、父との記憶を思い出していた。父と真紀とで遊園地に行ったり、海に行ったりとそういう思い出が頭を駆け巡る。

「陸君、叔父さんとの思い出を思い返しているの邪魔して悪いんやけど、あのマスクどこで手にはいったん？」

はやての言葉に陸は我に返ると、ヘルを手に入れた経緯を話した。父親が遺跡でマスクを掘り当て、それを自分にお守りとしてプレゼントしてくれた事を……。

「成程な……。さつき調べた結果が来たんやけど、あのヘルってマスクはロストロギアや。しかもオーバーSランクのな」

「ロストロギア？オーバーSランク？なんのこっちゃ？」

訳のわからない単語に陸は首をかしげる。

「ロストロギアは、別名古代遺失物と言って、簡単に言つと古代の人たちが使っていた道具と言つ事になるんや。んでもってそのロストロギアにはランクつちゆうもんがあつて、オーバーSランクはそのランクの一番上つて奴や」

「へー、つまりヘルは凄いロストロギアつて事になるんだな」

はやての説明に陸はうなずきながらヘルをそう解釈する。

「まあな、でもその半面オーバーSランクは凄く危険なモノなんや、本来は一応、次元漂流者である陸君が使つちやあかんのやけど……。フェイトちゃんやなのはちゃんの話やと陸君はあれを使いこなしてるみたいやからなあ……。現に他の局員があれを使いこなせるかどうか試したんやけどことごとく失敗しとるし」

さっきの説明は何処へやら、うるちよると動き回り、ブツブツとつぶやくはやて。そして何かを決めたように手をポンと叩く。

「よし！決めた！今から陸君は民間協力者として機動六課（こくご）で働いてもらうで！それでええな、陸君！？もちろん給料もやるし、働きながら、その真紀ちゃんを攫った犯人の手掛かりを見つけ出せる事も出来る。まさに一石二鳥や。悪い話やないやろ？」

目を輝かせながら陸の方を振り向き、マシンガントークで、陸に民間協力者として、働く事を促す。陸はため息をつきながらうなずいた。

「まあ、それしか真紀を攫つた野郎の手掛かりをつかむ方法はねー

だろーし、いいぜ」

それを聞き、はやては軽くガッツポーズをする。こうして陸は民間協力者として、機動六課に入隊することになったのだった。ちなみにジェニファアは陸が引き取る形で保護されることとなった。

海上の訓練場・・・、陸とジェニファア（どうしてもついでに行くと言いついたので連れてきた）はここで訓練ついでに、なのは、フェイトと共に機動六課の精鋭部隊、フォワードの面々に自己紹介することとなった。ちなみに何故はやてがいないのかは、デスクワークが多く、忙しい為である。

「お疲れ様、皆。訓練終了だよ」

なのはの掛け声とともに、訓練をしていた4人のメンバー達はなのは達の方を見た。

「あの、なのはさん。その男の人誰ですか？もしかして彼氏とか？」

蒼い髪のショートヘアの少女が陸の方を見てそうなのはに聞く。

「ち、違うよスバル。この人は民間協力者として機動六課で働く事になった平良陸君。みんなよろしくしてあげてね」

蒼い髪の少女ことスバルの問いには顔を真っ赤にしながら否定して、陸を紹介する。陸は頬を人差し指で掻きながら苦笑いしている。

「……はい！」「……」

「それじゃあ、フォワードの自己紹介をするね。まずティアナから」

「は、はい！ティアナ・ランスターです。階級は二等陸士です」

オレンジ髪の少女、ティアナが自己紹介をする。

「スバル・ナカジマ二等陸士です！よろしくお願ひします！」

スバルは元気いっぱい。

「エリオ・モンディアル三等陸士です。お願ひします！」

赤髪の少年、エリオもスバルに負けないくらいの元気で。

「キ、キャロル・ルシエ三等陸士です……。この子はフリードリヒといひます。フリードと呼んでください」

「キョク」

ピンクの髪をした女の子は恥ずかしそうにしながらもがんばって自己紹介をした。となりで小さな竜ことフリードがパタパタと飛びながら鳴いている。恐らく自己紹介をしているのだろう。

フォワード達の自己紹介が終わり、陸自身の自己紹介となった。

「一応、なのはから聞いていると思うが、自己紹介させてもらうぜ。平良陸だ。よろしくな」

自己紹介が終わり、スバルとティアナに陸は質問攻めにされた。

趣味はなんなのか？彼女はいるのか？等を聞かれた。はやてとは生まれたときからの幼馴染だと言うと、凄く驚かれたのは言うまでもない。ちなみにジェニファーも自己紹介をし、今ではすっかりエリオ、キャロと仲良くなっている。

「ねえ、陸君。一回訓練してみない？」

なのはの言葉にティアナが驚き、なのはに言う。

「訓練って・・・大丈夫ですか？見たところ陸さんにはデバイスとかなさそうですね」

『その必要はないぞ、娘』

ティアナの問いにジェニファーの持っていたバッグからヘルが飛び出し、なのはの代わりに答える。

「えっ！？マスク!？」

突然、マスクが飛び出し、浮いたことにティアナは驚く。

『ただのマスクではない。我が名はヘルマスク、太古より覇者と共にあつた仮面に宿りし精霊な「こいつはヘル。俺の相棒だ」おい！最後まで言わせる陸!』

威厳たつぷりの名乗り口上で決めようとしたヘルだったが、陸に遮られ台無しとなってしまった。ちなみにこの後、なのはからヘルは『高性能のユニゾンデバイス』と言うことでフォワード陣に教えられたということは言うまでもない。

「準備はいい？」



い掛かる。

「オラア！！！」

ドゴオ！！！！

陸の叫び声と共に豪腕が振り下ろされ、周りにいたガジェットとデッドマン・Wの数体がオイルと血を撒き散らしながら吹っ飛ばす。

勢いを殺さず殴り飛ばしたガジェットをそのまま掴むと、それをデッドマン・Wの群れへと一本背負いの要領で振り下ろした。

ドグチャァ！

気味の悪い音を立て、逃げ遅れたデッドマン・W4体がつぶれる。接近戦では不利と感じたガジェットがマシンガンで陸を狙い打とうとするが……、

「フン！」

陸は石を拾い、それをガジェットに投げつけた。ヘルと融合し、極限まで強化された豪腕から繰り出される剛速球はライフル弾すら遙かにしのぐ。そのまま、ガジェットを貫き、爆発！運悪くその後ろにいたガジェットとデッドマン・Wの数体を巻き込んだ。

「す……すごい……魔法も使わずに素手だけで……」

陸の戦いぶりを見て、エリオが啞然としながらそんな事を述べる。「ね？凄いでしょ？」

とジェニファアは自慢げに答える。一方のティアナはそれを複雑な顔で見ていた。自分達が苦労してやっと倒せるガジェットがこんな簡単にしかも魔法を使わずに倒されることが不愉快だったからである。

フォワード達が、そんなやり取りをしている最中に、デッドマン・Wとガジェットの数はあわせて残り10体となっていた。しかもタイムは10分もかかっていない。

「さて……と。最後の仕上げと行きますか」

そう言って、陸は駆け出し、勝ち目がないと逃げるガジェットを

追う。一体一体、確実にしとめた。こうして、10分でガジェットとデッドマン・Wは全て撃破され、廃墟にはぶちまけられたオイル、機械類、血と内臓・・・そして返り血で真っ赤に染まった陸が立っていた。

「ふー。終わったぜ」

そう言っつて、ヘルとの融合を解除し、外す。それと同時に、ティアナを除くフォワードの面々がやってきて、「すごい！」だの感想を述べる。

そんなフォワードに囲まれて照れ笑いしている陸をティアナは面白くなさそうに見ていた。魔法を使わず、素手だけで倒す。それがティアナの今までの頑張りが否定されたようにしか思えなかったのだ。陸に嫉妬のまなざしを向けながら彼女は拳を握り締めたのだ。

Let's go to the Next stage...

### チャプター3「旧友との再会、そして訓練」(後書き)

いかがだったでしょうか？

陸の圧倒的強さにティアナが妬ましい状態に……。これがとあるホテルで思わぬ事故を招くことに……。なるかもかもしれません。

実は、陸はヘルとの融合で強化された肉体のみで戦っており、魔法は全然使っておりません。次回、シグナムと模擬戦をやらせる予定ですので、使わせようかな？と思っております。お楽しみに！それでは(owo)ノシ

## チャプター4「シグナムとの模擬戦」(前書き)

今回、シグナムとの模擬戦！陸がついに魔法を使います。怒涛のバトルシーンを見逃すな！

相変わらずのグダグダっぷりですが、暖かい目をお願いします。

シグナム「魔法少女リリカルなのはSplatters・・・始まるぞ」

## チャプター4「シグナムとの模擬戦」

陸の訓練が終わり、機動六課の食堂

陸は機動六課の面々と共に食事を食べていた。

「ムシャムシャ・・・しかし、すごかったですね。陸さんの戦いっぷり・・・モグモグ・・・魔法を使わずに素手でガジェットをやっつけちゃうんだから・・・、すいませーんおかわりください」

「いや・・・俺はそんな事より、スバルの食いつぶりの方が凄いと思うんだが・・・」

陸は苦笑しながら、陸の訓練について語っているスバルを見て言う。陸がそう言うのも無理はない、スバルの前には皿がたくさん置かれていた。信じられないが、スバルが全部食べたのである。

『何と言う食べっぷりなのだ、この娘は・・・』

「ほえ、スバルお姉ちゃん凄い・・・」

これにはヘルやジェニファーも目を丸くして驚いていた。

そこへ・・・、

「おい、陸！やっぱり陸じゃないか！」

「ん？」

声が聞こえ振り向くと赤い髪を2つに分けて三つ編みにした9歳ぐらいの少女が陸の方へ近づいてきた。陸はその少女に見覚えがあった。昔、はやてに遠い親戚として紹介された少女であった。

「まさか、お前ヴィータか？いやー、久しぶりだなあ・・・、全然あの頃と変わってないな、特に背とか全く伸びてねーし」

陸はヴィータを見て、懐かしそうにそう言って、頭をなでる。陸の言葉にカチンと来たのか、ヴィータは怒鳴った。

「背が伸びてないって言うな！気にしてるんだぞ！」

ちなみに、ヴィータははやての持つ夜天の書のプログラムなので、成長ができない。故に9歳児の体が非常にコンプレックスだったりするのである。

「いやー、しつかしお前もここで働いていたなんてなー。偶然って恐ろしいぜ」

そう言って頭を掻きながら笑う陸。そこへ、

「久しぶりだな、陸」

と今度はピンクのポニーテールをしたヴィータとは対照的に背の高い女性がやって来た。

「シグナムさんもいたんですか？」

「まあな、しかし驚いたぞ。まさかお前がここに次元漂流者としてここへ来て、民間協力者として働いているとはな・・・なあ陸・・・」

「何ですか？」

シグナムが突然、陸に向かって顔を近づけながら切り出してきたので、若干引き気味になりながら恐る恐る聞く。

「私と模擬戦してくれ」

「へ？」

まさかのシグナムの模擬戦申し出に陸は目を点にして・・・シグナムの言葉の意味が分かると、顔を真っ青にして拒否する。

「無理無理無理！俺なんか相手になりませんって！」

「そんな事はない！主はやてから聞いたぞ。森の中でガジェットの大軍を倒したり、訓練でガジェットとデッドマン・Wを10分も満たないうちに倒したんだってな！」

「あれは、ヘル力で強くなっただけで、俺の力じゃないんだって！（はやての野郎、ベラベラ喋りやがって・・・後で泣かす！）」

陸は、必死になって自分の力ではなくヘル力だと弁明するも全くシグナムは聞く様子はない。ちなみに心の中で、はやてに復讐を誓っていたりする。（笑）

「おかげで武人としての血が騒いで騒いでしょうがないのだ！頼むこの通りだ！」

しまいには土下座してまで模擬戦を申し込むシグナム。さすがの陸もこれを断る訳にもいかず、結局受けることにしたのであった。

場所は代わり、六課の訓練施設のトレーニングルーム。何も無い真つ白な所である。だが、

「シャーリー、システムを起動してくれ」

「はい」

シグナムの声と共に、シャーリーがトレーニングルームのシステムを起動した。それと同時に、廃墟の風景が現れた。

「こ、これは……！」

突然周りの風景が変わり驚く陸。これは高度な実体映像だ。とシグナムは言う。

「私達は、これを使って訓練を行っている。さまざまな荒野だったり海中だったり……さまざまな局面を想定した訓練ができるのだ。さて……準備はいいか陸？」

そう言うと、シグナムは騎士甲冑をまとい、アームドデバイス『レヴァンティン』を取り出し、陸に突きつけた。

「ああ、大体分かったし、いつでもOKだ。行くぜヘル！」

『応！』

陸もうなずくと、ヘルを呼びだし、それを額に押し当てる。

「うおおおおおおおおおっ……！」

叫び声を上げるとともに、陸の全身の筋肉が膨れ上がり、上着の部分がはじけ飛んだ。

「うっしゃ！行くぜえ！」

ヘルとの融合が完了し、己の体に気合を入れた。

「それじゃあ行くよ、レディー……ゴー！」

なのはがお互いの準備が完了した事を確認し、コインをはじいて飛ばした。

チャリン……

そして、地面に着くとともに、お互いが動き出す。

「セエイ！」

シグナムが裂けぱくの気合と共に、レヴァンティンを振るう。陸は

それを紙一重でかわし、

「オラア！」

カウンターで拳を繰り出す。が、それをシグナムは空いている手でそれを掴む。それを陸は見逃さなかった。

「ウラア！」

ドゴオ！

「つつあ！？」

すかさず頭突きをシグナムに叩きこんだ。痛さに顔をしかめ、拳を離し、よろめくシグナム。追い打ちとばかりに、陸は拳を振り上げ、飛びかかる。だが、

「やるな・・・陸。だが・・・」

ガシャン！

シグナムはよろけから立ち直り、まっすぐ陸を見据える。同時に彼女の持っているレヴァンティンから葉莢が飛びだし、炎が燃え上がる。

「やべっ！？」

陸がそう叫んだときにはもう遅かった。

「紫電・・・一閃！」

炎をまとったシグナムの『紫電一閃』が陸に炸裂。爆音がトレイングルームに響き渡り、爆煙があたりに立ち込める……。早々に決着がついたか？そう、誰もが思ったその時だった。

「ば・・・馬鹿な・・・」

爆煙が晴れ、姿を現したシグナムの表情は驚愕の色に染まっていた。何故ならば・・・

「あ、危ねえー！。死ぬかと思った」

紫電一閃を防いだからだ。しかも落ちていた鉄パイプ（実体映像は手で触れる事も出来るのだ）で。これには彼女達も驚愕の色を隠せない。

『全く、我が鉄パイプに強化の術式を施してなかったら死んでいたぞ』



明するが、陸につっこまれ、怒鳴る。

「やるな・・・陸。短期間で小さいが砲撃魔法を撃てるようになるとはな・・・だが、こいつは防げまい！」

シグナムがそう言うと同時に鞭となったレヴァンティンに炎が燃え上がる。その激しさは紫電一閃を軽く超えていた。

「飛龍・・・一閃！」

シグナムが叫ぶとともに、レヴァンティンが炎の竜となって陸を襲う。

「糞っ！ヘルレーザー！・・・って駄目だ！火力が違いすぎる！」

陸も負けじと目からヘルレーザーを出し応戦するがその威力は一目瞭然。あっさりと飛龍一閃にはじき返されてしまう。

『むっ・・・、ならば致し方あるまい！ならば、我らも少し本気を出そうぞ。見るがよい！陸よ！叫べ！全てを吹き飛ばす、神の嵐を！』

「神の嵐？何だよそれ」

『ちなみに魔法発動ワードは「ヘルズハリケーン」だ。もたもたしている場合じゃないぞ』

ヘルに言われ、見てみると炎の竜が後わずかまで迫っている。

「しょうがねえ！ヘルズハリケーン！！！」

まともに食らうのはごめんなので、陸は技名を叫んだ。すると、マスクの口部分から、竜巻が巻き起こり、炎の竜をかき消した。

「何！？うあああああああああああああああつ！！！！？」

そのまま、驚くシグナムに直撃。そのまま、シグナムを廃墟のビルへと叩きつけた。そのまま、吹っ飛ばされた方に向かう。そこには、騎士甲冑や服がボロボロになって倒れているシグナムがいたので、助け起こし、トレーニングルームを後にしたのだった。

シグナムを抱き上げ、トレーニングルームを出た陸が見たものはあんぐりと口を開けているのは達であった。まあ、無理もないだろう。魔法や空を飛んだのは良いとして、歴戦の猛者であるシグナ

ムを次元漂流者であり新参者の自分が完膚なきまでに叩きのめしたのだから。それに・・・

「おいヘル（ボソボソ）」

『何だ？（ヒソヒソ）』

「お前、全然、奥の手見せてないだろ？（ボソボソ）」

『ふふ・・・そこまで見抜いていたとは・・・それでこそ我の相棒<sup>パートナー</sup>だ（ヒソヒソ）」

全員に聞こえないような声でヘルに問いかけるとやはり、と陸の読みは的中する。シグナムが奥の手を出していたのに対し、ヘルは全く奥の手を出していなかったのである。つまり本気を3分の1程度出しただけで戦っていたのだ。そこへ、

「おい、ヘルとか言ったな。お前何もんだ？」

とヴィータが陸に張り付いているヘルにそう言う。

「お前・・・高度なユニゾンデバイスつてはやてが言ってたけど・・・陸に取り付いて肉体を変化させるだけでなく、魔法もベルカ式よりも古い、神々の使っていた魔法だった。幾ら高性能とはいえ、普通のユニゾンデバイスにはそれを使うのは無理なんだよ！」

ヘルは黙って聞いていたが、やがて口を開いた。

『我が使っていた魔法を、ベルカより以前の時代のものだと見抜くとは・・・さすがは夜天の書の守護騎士なだけはある』

「いいから答えろ！」

『我は、ただのしがない神のなれの果て、この仮面にしがみついている死にぞこないの魂だ。それ以上でもそれ以下でもない』

ヘルはそう言うと、融合を解除し、陸の顔から離れ、続ける。

『我はあるもう一人の神のなれの果てを探している。探し出して決着をつけるためにな、その為に攫われた妹を救うために力を欲した陸に協力してやったのだ』

「もう一人の神のなれの果て？それってどういうこと？」

ヴィータの代わりになのはが聞くが。

『そこまでは言うことは出来ん。だが、我が目覚めたことを感知し

奴の方から必ず来る。その時に分かるだろうよ」

そう言つと、ヘルは陸に『行くぞ』と声をかけると踵を返し、陸の自室へと戻つたのだった。

（何やる、『奴』つて・・・それにヴィータに話していた時のヘルさん・・・何処となく悲しそうだったなあ・・・）

はやては、陸と共に去つていくヘルを見つめ、そう思っていた。

5日後、彼女達は知ることとなる・・・、ヘルに隠された血塗られた過去と因縁を・・・

陸は再び出会うこととなる・・・、妹をさらつた憎き二人組と・・・

そして、彼と彼女達は巻き込まれることとなる・・・、古より続く・・・2柱の神の戦いの渦へ・・・

任務先のホテル・アグスタで・・・

L e t ' s   G o   t o   t h e   N e x t   S t a g e . . .

## チャプター4「シグナムとの模擬戦」（後書き）

いかがだったでしょうか？今回、魔法を使いましたが・・・何気に技名などがマジンガー・・・。実はYoutubeでPS3&X-boxソフトとして発売されるスプラッターハウスを見て、リックのかぶってるマスクが何気にマジンガーに似ていたため（特に口部分が・・・）、やっちゃいました。ちなみに、ヘルと融合時の陸もPS3&X-boxソフト版のリックがモチーフだったりします。

さて、今回はホテル・アグスタで大バトルの予感です。お楽しみに。それでは（owo）ノシ

チャプター5「ホテル・アグスタ 前編」(前書き)

今回は、ホテル・アグスタでの激闘です。色々書いていたら結構長くなったので前編、後編に分けてみました。では、グダグダですが温かい目で前編をお楽しみください。

ルーテシア「魔法少女リリカルなのはSplatters・・・始まりです」

## チャプター5「ホテル・アグスタ 前編」

シグナムとの模擬戦から5日後……。陸は、フォワードと共にヘリに向かっていた。ホテル・アグスタで骨董品オークションがあるのでその警備だと説明を受けた。（ジェニファーは今回はお留守番である）

「あと、今まで分からんやったガジェットと、デッドマンの開発者がやつと分かったんや」

説明を終え、はやてはシャーリーに目配せする。シャーリーはうなずき、パネルを叩き、ある人物の画像を出した。その画像の人物は紫色の髪を長く伸ばした男であった。はやてからフェイトへと説明が変わる。

「この男の名はジェイル・スカエリツティ。生態関係の違法研究で指名手配されている」

そう言って、フォワード陣と陸に資料を渡した。

（こいつが……。こいつが父さんを殺し……。真紀をあのとカゲ野郎に攫わせた張本人……。そして、ジェニファーの母親を殺したのもこいつ……。）

陸は資料に目を通して、心の中で呟く。知らず知らずのうちに資料を持つ手が強くなっていった。絶対に許せない……。怒りと憎しみが陸の心の中に渦巻いていた。

「陸さん？ どうしたんですか、怖い顔して？」

隣にいたスバルの声で、陸は我に返った。どうやら考え込みすぎで、内面が顔に出ているのであろう。陸はすぐさま「なんでもないと笑いかけた。そんなこんなしているうちに、ホテル・アグスタへと到着し、すぐさま警備を開始したのであった。

ホテル・アグスタ、オークション会場。

「何で、俺こんな格好しなきゃなんないんだ？」

陸は黒いスーツ姿で、愚痴をこぼす。到着後、スバル達、フオワード陣は外の警備、なのは達、隊長陣は会場内の警備をすることになった。(ちなみに陸は会場と外の間警備である)ただ、会場内で隊員服だと会場の客に迷惑がかかるとの事で、なのは達はドレス姿、陸はスーツ姿となっているのであった。

「似合ってるで、陸君」

「そ、そうかあ？」

はやての言葉に、陸は照れながら答え、はやての方を見る。

(綺麗だなあ……。ちよっと見ないうちに、こんなに人って変わるもんかね?)

ドレス姿の幼馴染<sup>はやて</sup>を見て、陸は心の中でそう呟く。ただ、ただ、陸はその姿に見とれているしかなかった。

「なんや？ウチの晴れ姿に見惚れたん？」

「んな！？そんな訳ねえだろ！俺はただ、相変わらず胸小さいな！  
って思っただけだ」

はやてに凶星を指され、陸は顔を赤らめて否定する。

「そう照れない照れない。顔に出とるで」

「う、うるせえ！この貧乳狸！／／／」

「なんやとく、お仕置きや！」

「おわっ！？いででで、何しやがる！」

などと、任務中であることを忘れ、じゃれ合っている陸とはやてであった。ちなみに、なのはとフェイトは苦笑しながらその光景を見ていたのだった。

その頃……。ホテル・アグスタの遠方の森

そこに一組の男女の姿があった。男は、背の高い暗灰色の短髪の中年男性。そしてもう一人は、あの惨劇の夜、ガリユーと共にいた少女であった。

「お前の探し物はここにはないのか？」

男がそう少女に問いかける。少女は、何も答えず、ただ前方を見

ているだけであつた。

「ルーテシア・・・何か気になるのか？」

男は少女の方に顔を向け、再び問う。

「・・・うん」

と少女、ルーテシアは顎を引いて答えた。それと同時に指を虚空へ差し出す。刹那、画鋏ほどの小さな虫がルーテシアの指に止まった。インゼクト・・・、それがその虫の名であつた。

インゼクトはきしきしと、羽を鳴らし、主に何かを伝える。

「何と言っている？」

「ドクターの玩具が来ているって」

男の問いにルーテシアは答え、遠方へと目を向けた・・・。

その頃、ホテルのオークション会場では、陸のスーツの懐に入っていたヘルがフォワード達とガジェット&デッドマンとの戦闘を、察知し陸に知らせる。

『陸、どうやら戦闘が始まったようだ。我等も行くぞ』

「了解・・・、じゃ行ってくるぜ3人とも」

「気をつけてな陸君」

ヘルの合図と共に、陸はなのは達に一瞥すると駆け出した。

「高そうなスーツだけど・・・まあいいか。行くぜ、ヘル！」

『おう、いつでもいいぞ』

陸は苦笑しながらそう言うと、ヘルを取り出し、ホテルの窓を開け、フォワード達が戦っている外へと飛び出す。

『「フュージョン！オン！」』

叫びながら、陸はヘルを額に押し当てる。それと同時に筋肉が盛り上がる。

『「マジイイイイイン、ゴオオオオオオオツ！！！」』

陸とヘルが叫ぶとともに上半身のスーツがはじけ、地面に着くと共に融合が完了したのだった。

再び、話はホテル・アグスタの遠方へ・・・

「！」

陸の気配を察知し、ルーテシアがビクリと体を震わせ、冷や汗を流す。それを男は察知し、ルーテシアに聞く。

「?どうした」

「怖いものがある・・・、怖い何かがある・・・」

「怖いもの?何だそれは」

ルーテシアの脳裏によぎるのはドクターから頼まれた実験材料を確保していたとき、現れた白い仮面をつけた大男。恐らく、先ほどの気配はその大男かもしれない。そう答えようとしたその時、

『ごきげんよう、騎士ゼスト・・・そしてルーテシア』

背後から声が聞こえ、男(ゼストとは恐らく彼のことだろう)とルーテシアは、振り向く、そこには、陸のもつヘルとは違う、不気味な白い骸骨のようなマスクをつけた全身をマントで覆った人物が立っていた。

「・・・ごきげんよう、Mr・ゼロ」

「貴様が、何のようだ?」

『ジェイルから伝言だ。レリックはあのホテルにはないが、奴の実験材料として興味深い骨董品があるそうだ。それを取って来てもらいたい』

謎の人物、ゼロの口からスカエリツティの伝言を2人に伝える。

ゼストは、鼻をならすと、

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守るとスカエリツティに言った筈だ」

そう言って断った。ゼロはふむ、と唸ると、今度はルーテシアの方へ向き直る。

『ならば、ルーテシア。貴様はどうだ?ガリユーを使えば容易いとだと思つが・・・』

(卑怯だ・・・)

ルーテシアは、それを聞いて心の中でそれを呟く、だが、断るわ

けにはいかなかった。ゼロの機嫌を損ねるのはスカエリツティの機嫌を損ねるのと同じ事だからだ。

そう思い、ルーテシアは間をおかず頷く。

『すまぬな・・・、後でジェイルに言っただ菓子と茶を馳走するように頼もう』

くつくつく・・・と仮面の奥底でゼロは笑う。そして、マントからボディースーツに包まれた、右手を出すとルーテシアの右手のグローブの宝石、正確に言くとデバイス『アクレピオス』に触れる。それから数秒して、右手を離した。

『これでよし、ジェイルが欲している物のデータを送っておいた』

「・・・ありがとう、それじゃあ御機嫌よう、Mr.ゼロ」

『うむ、では武運を祈っている』

そう言うと、ゼロは魔法陣を展開し何処へと姿を消した。

それを見届けたルーテシアは数歩前に進み、空間を広く取る。デバイスに魔力を注ぐと、宝玉から五指に紫のラインが走った。

足元に、紫光を帯びた魔法陣が展開される。

「我は、乞う。小さきもの、羽ばたくもの。言の葉に応え、我が命を果たせ」

魔法陣より、無数のインゼクトが沸き立った。小さな羽音を立てながら、虫達が空へ解き放たれてゆく。ある一群は、戦うためにある一群は、探すために。

続いて、ルーテシアは、アスクレピオスに語りかけた。正確にはデバイスを通して、最愛の友に向かって、だ。

「・・・ガリユー。ちょっと、お願いしてもいい？」

アスクレピオスが輝く。同時に漆黒の光が、流星となって空を駆けた。

その頃、アグスタの外では、フォワード陣、そしてシグナム、ヴィータがガジェットとデッドマンの軍勢と戦っていた。

雑兵クラスのデッドマン・W、そしてそれを強化したデッドマン・

パワード（以下デッドマン・P）の大軍が彼女らの前に立ちふさが  
る。

「紫電一閃ッ！！！！」

「ラケーテン・・・ハンマアアアアッ！！！！」

ズバァ！バゴオン！グチャァ！

『ギヤアアアアアアアアアアアアアア！！！！？』

『シャギヤアアアアアアアアアア！！！！？』

シグナムの『紫電一閃』が煌めき、ヴィータの『ラケーテンハン  
マー』が唸る。たちまち、デッドマン達の大隊が斬られ、潰され、  
血しぶきが宙を舞う。

「オオリヤア！！・・・ハアハア・・・もう、敵がこんなに。凄いな  
、シグナム副隊長達、でも・・・陸さんも凄いよね？あのシグナ  
ム副隊長に勝ったんだから」

「うるさいっ！無駄話はいいから目の前の敵に集中しなさいよ！」  
リボルバーナックルでデッドマンを粉碎しながら話しかけるスバ  
ルをティアナは一喝する。

（何よ！フオワードの皆は陸さん陸さんって・・・、大体、あのマ  
スクがないんじゃないただの一般人じゃない！私だって、その気になれ  
ば・・・！）

心の中でそう呟き、カートリッジをリロードしながら、続ける。

「（一人でこんな奴らを倒すの位出来るんだから！）クロスファイ  
アアア・・・」

ティアナはこの時、知らなかった・・・。この焦りが、とんでも  
ないミスを生んでしまう事に・・・。彼女の射撃線上に・・・相棒<sup>スバル</sup>  
がいる事も知らずに・・・。

「シューウウウウウト！！！！」

ドウドドウ！ドドドドウ！

『グアアアアアアアアアアアッ！！！！？』

『ゲギヤアアアアアアアアアアアッ！！！！？』

ティアナが放った渾身の魔力弾はデッドマンやガジェットを次々



は・・・、

「ティアナ！この馬鹿！！無茶やった上に味方撃つてどうすんだ！！」

ミスシヨットという事の重大さを知り、啞然としているティアナを怒鳴りつけていた。

「あの・・・ヴィータ副隊長、今のも・・・その・・・コンビネーションの内で・・・」

「馬鹿か！？あれはどう見ても直撃コースだぞ！あれもコンビネーションの内なのか！？」

フォローしようと弁明するスバルをヴィータは怒鳴りながら聞く、スバルはそれを聞き、黙りこくってしまった。

「違うんです！今のは私が・・・五月蠅え、馬鹿共！こつからは私とシグナム、そして陸の3人でやる！すつこんでろ！」ツ！！？」

ヴィータはティアナの言葉を遮り、そう怒鳴ると、シグナムと共に、デッドマンとガジェットの群れに斬りこんで行く、陸はヴィータ達に加勢しようとして、ティアナの所に歩み寄ると、彼女の肩に手を置いた。

「そう落ち込むなよ。ミスは誰だつてあるもんさ」

励ましの言葉をティアナに言つて、戦闘に参加したのだった。

「・・・」

ティアナは一人、唇をかみしめながら俯いていた。ミスをしてしまったのが悔しいのもある。だが、もつと悔しいのは、自分が嫉妬し、仮面がいなければ何も出来ない奴と見下していた陸に励まされた事だった。

（あんな奴に励まされるなんて・・・、仮面がなければ魔法すら使えない奴に・・・）

自然と涙がこぼれる。

「ティア・・・」

そんな涙を流す彼女をスバルは黙って見ている事しかできなかつ

た。

そんな中、激闘はさらにヒートアップしていた。

「オオラアアアアアアアア！」

グチャア！

『ビギヤアア！！？』

陸の剛腕がデッドマン・Pの頭部を潰す。入っていた血と脳漿が飛び散り、陸の体に降りかかった。すぐさま、殺気に気づき、手に持った鉈を振り回すもう一体のデッドマン・Pの手を掴み、その鉈を持つ腕を引き千切る。

『ゴギヤアアアアアアアアアアアアアア！！？』

ドスッ！

『べ！？』

引きちぎられ、痛みに悲鳴を上げるデッドマン・Pに先ほどちぎった腕から拝借した鉈を頭部に叩きつけ、撃破した。そして・・・

「ヘルズハリケエエエエエ！」

マスクの口部分から、竜巻を出し、デッドマンとガジェットを吹き飛ばす。巻き込まれたデッドマン& a m p・ガジェットはきりもみ回転しながらぶつかり合い、物言わぬ肉塊、鉄塊となり地面に落ちる。

「やるな、陸の奴！」

「だな、私達も負けてらんねえ！」

陸の戦いっぷりに感心しつつも、ヴィータとシグナムは攻撃の手を緩めない。デッドマンとガジェットの数は、大幅に減って行きつつあった。このまま殲滅か？そう2人が考えた時だった。

「ヴィータ！シグナムさん！危ねエ、後ろだ！」

「へ？うわっ！？」

「む？なっ！？」

陸の言葉を聞いて、後ろを振り向くと、2つの犬と人間を足したような、顔が迫って来た。2人は咄嗟にかわす。だが、

「くっ!?!」

「シグナムッ!?!」

シグナムは気づくのが一歩後れ、異形の首の一つが、シグナムの腰に巻きつく。

『キイーヒツヒツヒ、捕まえたア』

けたたましい笑いと共に、シグナムを捕らえた張本人が現れる、緑と淡い紫のボディーパーイント。そして、なによりそれを印象付けるのは長く伸びた2つの首であった。そう、これを伸ばしてシグナムを捕まえたのであろう。

「『知能付き』もいたのか・・・、だが、レヴァンティン!」

ここでシグナムの言っていた知能付きについて説明しよう。

知能付き・・・、普通デッドマンには自我と言うものがない。ただ、ごく稀に進化をし、知能がついたデッドマンを『知能付き』と呼んでいる。その戦闘力はガジェットやデッドマンを遥かに超えており、中にはAランク、あるいはSランクの魔術師と互角に戦えるデッドマンも存在するため管理局から危険視されている。

・・・さて、説明が終わったので、話を元に戻そう。

シグナムの叫びと共に、レヴァンティンから、薬莢が飛び出し、炎が巻き起こる。

「紫電・・・」

一閃と叫ぼうとしたときだった。

ブウン!ガキーン!

「うあっ!?!」

突如、巨大な鎌のような形をしたブーメランが飛来し、レヴァンティンを弾き飛ばす。

『カツカツカ・・・、残念でしたア』 おい、「ツインヘッド」油断してんじゃねーぜエ?捕まえるときは得物をとらねーとよオ』

『キイーヒツヒツヒ、ありがとよオ。「リッパー」』

「ツインヘッド」と呼ばれた異形は笑いながら、そのレヴァンテインを弾き飛ばした「リップパー」に礼を言う。リップパーの姿は一言で言えば死神のような姿であった。具体的に言えば、死神のローブを外し、代わりにむき出しの筋肉を顔をのぞく全体につけたような姿。そして、頭部にある鎌のようなブーメランが印象的である。その足元には、ヴィータが押さえつけられていた。

「ヴィータ！」

「す、すまねえ・・・油断した」

「おいおいイ〜。人の心配してる場合かよオ〜」

バリイ！

シグナムにそうあざ笑うと、ツインヘッドはバリアジャケットの胸部分に手をかけそれを破く。それと同時にシグナムの胸のふくらみがプルンと音をたて弾みながら露となる。

「っ!?!」

「おおつ、デケエ胸してんなあ〜」

「柔らけエ〜、まるでマシユマロのようだなア〜。キヒヒ!」

リップパーはそれを見て、鼻息を荒くし、ツインヘッドは笑いながらシグナムの胸を揉む。

「くっ・・・!」

シグナムは顔を赤らめながら歯を食いしばり2体の異形を睨む。だが、それは2体の情欲を掻き立てる他ならなかった。

「キイーヒツヒツヒ。いいねえ、その表情。そそるぜエ・・・」

「なあ、俺もう我慢できねえよ。コイツを犯つちまおうぜえ。早く、コイツが泣き叫ぶ姿みてえしよオ〜」

リップパーの言葉に、ツインヘッドはそう焦るなって、と言い、もう片方の首をシグナムの両手を縛り、自らの両手で両足を押さえつける。

「やめろ!やめろオ!シグナムを離しやがれツ!」

ヴィータが2体がシグナムに何をする気が悟り、喚くが2体は気にしないで続ける。



に突き刺さるかと思った。だが、

「ふん！」

バキーン！

陸は振り向きもせず、ブーメランを裏拳で叩き折った。

『な、何イ！？そ、そんな馬鹿な・・・』

リップパーは目の前の光景が信じられず、叫び声を上げる。陸は、ゆっくりと振り向くと、仮面の奥で怒りの形相となりリップパー達を睨む。

「よくもシグナムさんを、好き放題にやってくれたな・・・」

『ヒ、ヒイイ！』

陸の怒りのオーラにリップパー達は恐れ戦きながら、後ずさりする。そして、

『ご、ごめんなさああああああああい！』

『あつ！ツインヘッド！お前一人で逃げるなんて卑怯だ・・・ぞ？』

ツインヘッドが恐怖に耐え切れず踵を返し逃げ出した。それを追いかけてようとし、立ちすくんだ。何故なら、ツインヘッドが逃げている方向に、『それ』が立っていたから・・・。

ドン！

そのまま、ツインヘッドは『それ』とぶつかった。

『いつて・・・てめえ！何処見て歩いてやがんだ！？気をつけ・・・

な！？お、お前・・・』

ドシュ！

『は・・・はしゅ〜』

ツインヘッドは「お前は！？」と言おうとしたが、その前に伸びる爪に貫かれ、意味不明な断末魔を残し息絶えた。

『は、はああ！』

リップパーは、同胞の死にガタガタ震えながら『それ』から後ずさりをする。陸も、仮面の奥で怒りと驚きの混じった顔を浮かべ、『それ』を見ていた。

「てめえは・・・」

陸は静かに・・・『それ』に向かって言う。拳を握る力が知らず知らずの内に強くなる。なぜならば、『それ』は陸がこの世界に来た目的そのものであったから・・・、  
「会いたかったぜ、トカゲ野郎オオオオオオオオオオッ！」  
そう、『それ』は陸が探していた、『トカゲ野郎』ことガリユーだったのだから。

L e t ' s   G o   T o   T h e   N e x t   S t a g e . . .

チャプター5「ホテル・アグスタ 前編」(後書き)

いかがだったでしょうか？上位にあたる『知能付き』のデッドマンを登場させたら、思いのほか長くなったので前編、後編にしてみました。陸VSガリユーを楽しみにしてくださった方・・・すいません。(土下座)

ちなみに今回登場した『知能付き』デッドマンのリッパードとツインヘッドですが、イメージはマシンガンZに出てくる敵ロボット『機械獣』のガラダK7とダブルスM2をバイオザードに出てくるクリーチャーっぽい感じしたような感じです。(汗)

さて、次回はお待ちかねの陸VSガリユーが始まります。迫力のあたるバトルシーンにしたいと思いますので応援してください。

それでは(owo)ノシ

チャプター6「ホテル・アグスタ 後編」(前書き)

お待ちせしました。久々の更新です。今回は、陸VSガリユー決着  
！勝つのはどっちだ！？

相変わらずのグダグダっぷりですが温かい目をお願いします。

イビル『魔法少女リリカルなのはSplatters・・・始まるぞ』



「さて……、捕まえたぜ、トカゲ野郎……。このままテムエの頭を握りつぶしてやりたい気分だが、その前にテムエに二つ聞きてえ事がある……」

ガリユーの頭を掴む手に若干力を込めながら陸は続ける。

「真紀はどこに居やがる……。それと……。ジエイル・スカエリッティとテムエの関係はなんだ？それを言ったらこの手は離す……」

陸の問いにガリユーは答えようとはしない。

「黙ってるって事は、言う気はねえって事でいいな……」

そう言って、掴んでいた手の力を強めようとしたその時だった。

「シャッ！」

「あ、あぶねえ！陸ッ！」

突如、ガリユーの手から爪が伸び、陸を襲う。だが、

「おっと」

「ガシッ！」

陸はそれをとっさに空いている手でつかんだ。その瞬間、ガリユーはもう片方の腕で陸を狙う。

「やべ……。もう片方も……」

「ドガッ！」

咄嗟にガリユーの頭を掴んでいる手を離そうとするも間に合わず、爪が陸の腹に直撃……、

「あ……。あぶねえ。腹筋が固くなってなかったら死んでたぜ」

したのはいいが、陸の腹筋は固く体を突き破るには至らなかった。

「この野郎……。お返したッ！」

そう言うと陸はガリユーの腕を掴み、そのまま放り投げた。放物線を描き、落下するガリユー。だが、空中で体制を立て直すと、目にもとまらぬスピードで陸に肉薄。爪を振るう。

「おわっ！？」

だが、それは陸を切り裂くには至らず首筋に5つの赤い線をつけただけにすぎなかった。だが、

シャツ！

「うおっ!？」

再び爪が振るわれ、今度は脇腹あたりに赤い線が走る。胸に、腕に、足に目にもとまらぬ速さで爪が振るわれ、それらに赤い線がつけられる。このスピードに陸はついていけず為すがままだった。だんだんと傷が深くなり、陸の体は傷からの出血により真っ赤になっていた。このまま、大量出血で倒れてしまふのか？とヴィータとシグナムはそう危惧していたが・・・、それは杞憂に終わった。

「そこだッ！」

陸がそう叫びながら拳を握りしめ、何もいない方向へストレートを放つ。その時だった。

バキィ！

拳が何かにぶつかる音が聞こえ、何者かが姿を見せる。ガリューだった。陸は、高速の世界からガリューをとらえるためワザと攻撃を受けたのだ。そして、動きをとらえた後、再び仕掛けてくるのを見計らって、カウンターを喰らわせたのである。

「ううりゃっ！」

裂けはくの気合と共に陸は飛び上がると両膝を地面に突き刺す要領でガリューに追い討ちをかける。ドォン！と轟音と共にガリューが地面にめり込み大量の血を吐き出す。勝負ありなのは確実であった。

「ふう・・・」

と息を吐き出しながら陸は立ち上がり、ガリューを見た。膝が当たった腹部分の装甲は完全に破壊されており赤黒い組織が見えている。目に光は無くぐったりとしていた。

「やべ・・・殺しちゃったか？」

それを見た陸はしまった。と心の中で呟く。折角の情報源を勢い余って殺してしまったのだ。手がかりは完全に失ってしまったか？そう考えていたが、ヘルがいや。とその考えを否定した。

『まだ、死んではいけない。かるうじてだが生きている』

「そうか・・・、シグナム、ヴィータ。コイツを連れて行ってくれ」

そう言つてシグナムとヴィータに声をかける。その時だった。

『困るな。彼女の大事なパートナーを連れて行つてもらつては』

声と共に殺気を感じ取り陸は振り向く。そこにはドクロが笑みを浮かべたような気味の悪いマスクを被つた全身をマントで覆つた男が立つていた。

（何だこいつは・・・そして吐き気を催すほどの殺気と邪悪・・・ただモンじゃねえ・・・）

それが陸がその男を見たときの第一印象だった。シグナムとヴィータもデバイスを構えているが、おびえているのは確実である。ここは一旦撤退したほうがいいか・・・そう考えていたその時だった。

『貴様は・・・イビル!』

ヘルがその男、イビルに向かつて叫ぶ。その声音は憎しみの色が浮かんでいた。

『久しぶりだな、兄上。会いたかつたぞ』

イビルは対照的に飄々とした態度でヘルの言葉を受け、そのまま続けた。

『まさか、兄上とこんなに早く会えるとはな。いやはや、これも兄弟の絆と言つ事が・・・』

『兄弟の絆・・・だと!? よくも又ケ又ケとそんな事を・・・ふざけるな! 貴様とは兄弟の縁を切つた筈だ!』

「お、おいヘル・・・。何が何だかさっぱりわかんねーんだが・・・

」

ヘルとイビルのやり取りに訳が分からず聞き返す陸。ヘルはそれを聞いてため息をついた後、静かに答えた。

『陸、貴様にはゆっくりと話しておくべきだったが・・・こいつはイビル。・・・かつて弟だったもの・・・そして我が探していた敵でもある』

「こいつが・・・」

『お初にお目にかかる。我が名はイビルマスク、今はこの乗っ取っ



そう言つと同時に、  
バツ！

「……なっ!?」「」

イビルの姿が消え、陸、シグナム、ヴィータの3人の体に衝撃が走り、意識がシャットダウンされた。

『兄上の依り代の力はこんな物か……つまりぬ』

陸達を目にも止まらぬ速さで、当身を使い倒した後、イビルはガリユーのところへ行き、ガリユーを担ぎ上げた。

『ま、待て！まだ……勝負は……』

『む？まだ意識があつたのか兄上。さすがは元神だ。……私もそう言える立場ではないがな』

かろつじて意識のあつたヘルを見て、イビルはくつくつく。と笑いながら言つ。そこへ、イビルから通信が入ってきた。

『ゼロ。ガリユーの回収は済んだかい？』

スカエリツティであった。イビルはああ、と頷きながら答える。

『律儀に依頼品も手に入れている』

『ご苦労様、任務は完了だ。帰還したまえ』

『了解した』

そう言つと通信を切り、ヘルの方へと顔を向ける。

『それでは、私は帰らせてもらうよ。後、兄上の依り代君に私に勝つにはもう少し腕を上げたまえと言っておいてくれ』

『イビルッ!』

そう言つとヘルの制止も聞かず何処へと姿を消したのであった。

「……ここは……?」

陸が目を覚ますとそこには真っ白な天井が映っていた。起き上がり、あたりを見回してみるとどうやら病院のようだ。

「俺は確か……、イビルとか言つ奴と戦つて……」

そう呟きあることを思い出す。そう、ガリユーのことだ。

「そつだ！あのトカゲ野郎は！？」

陸はそう言つと、起き上がるうとする。そこへ、

『落ち着け陸……。あのトカゲはヤツが持つていった』

ベッドの横にかけてあつたヘルが陸の問いに答える。

「ヤツつて……。イビルの事か！？畜生……」

それを聞いた陸は悔しさに唇をかみ締め俯いた。そこへ……、

コンコン。

「陸君おる？」

ドアのノック音と共に声が聞こえてきた。はやてだ。

「あ、ああ……」

ガチャリ。

「入るで」

そう言つて入ってくるはやて。陸はどう言つたらいいかわからなかつた。折角の証拠物件をみすみす逃してしまい、オークションに出ていたロストロギアも奪われてしまった。怒っているに違いない。気まずい雰囲気があたりを包む。

「すまねえ」

はやてに頭を下げる陸。彼の精一杯の謝罪であつた。陸は顔も上げず続ける。

「俺の所為で証拠物件もロストロギアも奪われちまつた。今更許してもらえないとは思うけど……。ごめん……」

沈黙があたりを包む。不意にはやてが沈黙を破つた。

「陸君。顔上げて」

ビクッ！

（や、やっぱ怒つてた……）

それを聞いた陸は肩を震わせる。来るのはビンタだろうか、それとも解雇宣言だろうか……。？色々心配しても埒が明かないので覚悟を決め、顔を上げる。

ポン。

（手を肩に置いた！？解雇されんのか俺！？）



チャプター6「ホテル・アグスタ 後編」(後書き)

いかがだったでしょうか。

ここ最近、忙しくて黒飛蝗弐の更新のみしか出来ずまことに申し訳  
ありませんでした。黒飛蝗弐が一段落し、再び更新するに至ってS  
platters本編をもう一度読み返してみたり……。本当に  
楽しみにしていた読者様、お待たせして本当にすいませんでした(土下座)

さて、次回はあの魔王様が降臨となります……。それを止めるた  
めに陸が戦う事に……。楽しみに待っていてください。

それでは(owo)ノシ

## チャプター7「激突する想い」(前書き)

今回は魔王降臨のお話です。ちゃんとあのシーンが再現できてるかどうか正直、不安ですが・・・(汗)後、ヘルのが過去が明らかに相変わらずのグダグダですが温かい目をお願いします。

ヘル&ティアナ『魔法少女リリカルなのはSplatters・・・  
・始まります』

## チャプター7「激突する想い」

「はー、久しぶりの宿舎だなー」

ホテル・アグスタでの戦いから数日後。陸の怪我もさほど対したことではなく、すぐに退院できるようになった。宿舎の入り口で、荷物を肩にかけながら陸は呟く。

『病院に運ばれて意識不明だったのを含めて2、3日しか経ってないだろう』

「細かいことは良いんだよ。ただいまー」

ヘルがつっこみに陸はそう言っていると、宿舎のドアを開け、中に入る。「ありゃ？誰もいないのか？」

中に入った陸を待っていたのは真つ暗な空間、辺りを見回すと・

パンパパン！

「ぬおっ！？何じゃあー！」

突如、クラッカーが鳴り響き、陸は驚きながら後ずさる。

「……陸さん（お兄ちゃん）退院おめでとー」「」「」

「ほえ？」

突如明かりが着き、そこからジェニファー、スバル、キャロ、エリオがやって来る。呆氣にとられる陸、そこへ、

「びっくりした？」

「にやはは。ゴメンね驚かせちゃって……」

『高町とテストロツサ……だったか？これはどういうことだ？』

なのはとフェイトがやって来た。ヘルはなのはに振り向き問いかける。

「実はね、陸君とヘルさんの退院記念パーティを開こうってスバルやジェニファーちゃんが言い出したんだ」

「そうか……、ありがとな」

なのはの言葉に、陸は苦笑交じりに礼を言う。ふと、陸はあるこ

とに気づき、フェイトに問うた。

「そーいや、はやてのヤツはどうした？」

「はやては、シグナム達と一緒に現場検証してる」

「現場つて、ホテル・アグスタか・・・」

陸の言葉にフェイトは頷く。それと同時に陸の脳裏にイビルに大敗した瞬間が蘇り、顔をしかめた。あの圧倒的な力に為す術もなく負けた自分……。果たして次に会ったときに彼に勝てるのだろうか？

(いや・・・勝つ！勝たなきゃならねえ・・・、真紀を助けるためにも・・・そして・・・)

拳を強く握り、スバルやジェニファアを見て続ける。

(ジェニファアや皆を守る為にも・・・)

「陸兄ちゃんどうしたの？」

ジェニファアの声で我に返った陸は、いや、なんでもない。と言うとパーティーに参加したのだった。そんな陸とは裏腹にヘルは気になったことをスバルに聞く。

『所でスバルよ。何故ランスターの姿が見えぬのだ？』

「ティアのこと？ティアなら外で自主練してる・・・、よっぽどあの事が答えたのかなあ・・・もうこの所ずっとなんだ」

スバルの言葉にふむ・・・。とヘルはうなると外へと出る。

「ヘル？何処に行くんだ？」

『うむ、夜風に当たりにな・・・』

陸の問いにそう答えるとヘルは宿舍の外へと出たのだった。

『ム・・・』

ヘルがふよふよとティアナを探して宿舍の周りを漂っていると、庭付近でティアナを見かける。魔法で光の玉を作り出し、それを的にして練習をしているようだ。その表情は何処となく焦っており無茶をしているように見えた。

(まるであの時の我のようだ・・・今のランスターは・・・)

ティアナの表情を見たヘルは胸中でそう思い、過去へと飛ばす。自分がまだ『神』であった時の事を妻を殺され憎しみに身を支配されていたときの事を……。ただ見ているつもりであったが、彼女の訓練を見ていくうちに気がついたら、ティアナに声をかけていた。『頑張っているようだな、訓練を』

「……ヘルさん？」

ヘルに声をかけられ、ティアナは振り向く。ヘルはティアナに近づきながら続けた。

『スバルから聞いたが……。ホテル・アグスタでの一件が終わってからずっと暇さえあれば自主練をしてるそうだが、大丈夫か？心なしが無茶をしてるようだからな』

「……貴方には関係ありませんよ。何しに来たんですか？茶化すつもりなら帰ってください！！」

ティアナはそう言ってヘルにそっぽを向く。だが、ヘルは違う。とティアナに言う。

『我はお前が心配なのだ。今のお前は昔の我にそっくりなのだからな』

「そっくり？どういう事なんですか？」

ヘルの言葉にティアナは頭に疑問符を浮かべながらヘルに問いかける。少し昔話をしてやるう……。とヘルは深くため息をつきながら口を開く。

『我が神の成れの果てだということはお前も知っているだろう……。我がまだ神であったころ、我には妻がいた……。愛すべき妻がな……。美しく優しい……。我にはもったいなさ過ぎる妻だった……。』

淡々と自分の過去を打ち明けるヘル、ティアナは黙って聞いていた。

『我と妻は幸せに暮らしていた……。だがある日のこと……。我がいない間に妻は殺されてしまったのだ……。実の弟にな……。それを知った時、我は怒り狂った……。何とか弟にしかるべき報い

を受けさせるためにな・・・」

そう言つて夜空を見上げるヘル。ティアナにはヘルの表情に悲しみと後悔を滲ませているように見ていた・・・。

「弟を見つげ出し・・・死闘の果て・・・復讐は果たした・・・だが、我に残つたものは何もなかった・・・あるとしても世界を崩壊させかけた罪のみだった。・・・その罪故、我はこの姿なのだよ」

「・・・何が言いたいんですか？」

話を終えたヘルにティアナは聞いた。そのままの意味だ。とヘルは返す。

「復讐を成し遂げても・・・妻は帰つては来ない。それはお前にだつて言えることなのだ。すこしテストロツサから聞いたのだがランスター、貴様は殉職した兄の遺志をついで執務官とやらになりたがつているそうだな。そうして、兄を見下したヤツを見返してやる。大方そう思っているのだろう」

「!？」

凶星なのか、ティアナは顔をこわばらせる。何故知っているのか？そう言う表情であつた。

「我は、自分で言うのもなんだが幼い頃から洞察力が鋭くてな、表情などでたいていは分かるのだよ。どうだ？当たらずとも遠からず・・・といった所か」

「・・・ヘルさんの仰るとおりです・・・」

ヘルの言葉に、ティアナは俯きながら兄の事を話し始めた。

彼女、ティアナ・ランスターには一人の兄がいた。名はティード・ランスター。物心着く前から両親は死んでおり、彼が代わりにティアナを育てていた。嘗て管理局の首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師であつたが、ティアナが10歳の頃、逃走中の違法魔導師との交戦中に殉職。その葬儀の際、心無い上司の言葉が彼女の心に大きな傷を残したのであつた。

「私は、スバルやエリオみたいに才能もないし・・・、キャロみた  
いなレアスキルもない・・・。だからこうでもしないと強くなれな  
いんですよ・・・」

『・・・成る程な・・・』

ティアナの胸中を聞き、ヘルは頷く。

『お前の言う事も然りであるが・・・、それはスバルや他の隊員を  
危険にさらしてまですることなのか？そこまでして、理想を達成し  
たとてお前の兄が喜ぶとは思えんが・・・』  
「ッ!？」

ヘルの言葉に、言い返せないティアナ。そんなティアナにヘルは  
言い過ぎたな・・・。と言うと、踵を返し、宿舎に戻ろうとする。  
ふと、何かを思い出しティアナに振り向くと、

『一つ言い忘れていたが・・・、理想を手にする為に特訓をするの  
はいい事だ。だが、その理想を手にし、兄の無念を晴らした後の事  
を考えておく事だ・・・』

そう言うのと、ヘルは宿舎へ戻っていったのだった。

その翌日・・・、

「さて、それじゃあ朝のおさらい2ON1で模擬戦するよ。まずは  
スターズから行くからバリアジャケットの準備いいね？」

「はい!」

とある廃墟で模擬戦が行われていた。まずはスバルとティアナが  
なのはに挑む事となり、なのはの指示でバリアジャケットを装備す  
る。ちなみにエリオとキャロは陸、ジェニファー、ウィータとで近  
くのビルで見学をしている。そこへ・・・、

「もう、模擬戦始まつてる?」

「今はスターズの番」

遅れてフェイトがやって来た。フェイトの問いにウィータが答え  
た。そっか。とフェイトは言うのと、訓練中のスターズとなのはを見  
る。

「本当はスターズの分も私がやるはずだったんだけどね」

「ふーん・・・で何で遅れたの？」

「・・・寝坊しました」

陸の問いにフェイトは涙目で答える。そんなフェイトにまあ元気だせよ。とヴィータは言うのと、なのはを見やる。

「にしてもなのはの奴、最近訓練密度高濃度だからなあ・・・少し休ませねえと」

「確かになのは、部屋に戻った後もずっとモニターに向き合って訓練メニュー作ったり、フォワードの動きをチェックしたりしてるから・・・」

ヴィータの言葉にフェイトは頷きながら答える。フェイトとなのはは宿舎では同室であるため、フェイトはなのはのそう言う仕事熱心な事を知っているのだ。

「なのはさん、訓練中でもいつでも僕達のこと見ててくれてるんですね」

「本当に・・・ずっと・・・」

エリオとキャラはそれを聞き、なのはに対してある種の感動を抱いた。

「お？何か二人の動きが変わったぜ？」

「ああ、クロスシフトに入るみたいだな」

スターズの動きが変わったことに陸の問いにヴィータが答えた。

ティアナは後方でクロスファイアの構えに入り、スバルはなのはに向かって一直線にウィングロードを駆けて行く。

「クロスファイアアアアアアアアア、シュウウウウウウウウウ  
！！！！！」

ドワツ！！！！

ティアナの掛け声と共に、大量の魔力弾がなのはに向かって飛んでいく。だが・・・、何か様子がおかしいことにヴィータやフェイトは気づいていた。勿論、陸のポケットにいたヘルも・・・。

『何だ？あの勢いのない魔力弾は・・・』

「そういや、なんかキレがねえな」

「コントロールは良いみたいだけど」

そう、全くキレがないのだ。その魔力弾をかわしたなのはヘスバルが突っ込んで来る。

「これは・・・フェイクじゃない!? 本物」

そう呟くと、アクセルシューターを放つ。それをシールドを張り、全弾防ぐと、リボルバーナックルを振り下ろす。  
ガギーン!!!

なのはもシールドを展開し、それを防ぐ。だが、スバルの勢いは止まる事はない。なのははそんなスバルに蹴りを入れ、吹っ飛ばした。

「うわあ!?!?・・・つとと!?!」

危うく落ちそうになるもスバルはウイングロードに着地する。

「駄目だよ、スバル。そんな危なっかしい軌道は」

「すいません! 今度はちゃんと防ぎますから!」

「ん・・・? 防ぐって何を・・・」

なのはに叱られて、謝罪するスバルの言葉を聞き、首をかしげる陸。その時だった。

「砲撃!? ティアナが?」

フェイトの驚いた声が聞こえ、振り向くと、そこにはビルに登って、砲撃魔法のスタンバイをするティアナの姿があった。ティアナは砲撃魔法を教わった事も使った事もない。そんな彼女が砲撃魔法をやるなど考えていなかったからだ。

『スバル、クロスシフトC! 特訓の成果見せるわよ!』

『応ッ!?!?!』

ティアナの念話にスバルは答えると、リボルバーナックルのカートリッジをリロードさせると、再びなのはに突貫。ぶつかり合い火花が散る拳とシールド・・・。そこへ、ティアナの砲撃が・・・、

「ふえっ!? ティアナおねえちゃんが消えちゃった!」

「あっちのティアナさんは幻影!?」

「それじゃ、本体は？」

来ることなく消える。どうやら幻影魔法のようだ。慌てるジェニファー、エリオ、キャロ。

『陸、どうやら上のようだ』

ヘルに指示され上を見るとティアナがいた。どうやらウィングロードから降りて、奇襲をかけるつもりである。

「一撃必殺ッ！！！」

そう叫びながらクロスミラージユから魔力刃を出し、なのはに突貫する。決着か！？そう思った時だった。

「・・・レイジングハート・・・モードリリース・・・」

なのはの凍てついた声音と共に・・・、  
ドンッ！！！！

爆音が鳴り響いた・・・。

「くっ・・・なのはは・・・？」

フェイトは目を細め、なのはの身を心配する。やがて煙が晴れなのは達の姿が露となった時、その場にいた誰もが驚愕した。

何故なら・・・

「おかしいな・・・どうしちゃったのかな？二人とも・・・」

スターズの攻撃を素手で防いでいるなのはの姿があったのだから・・・。

「模擬戦は喧嘩じゃないんだよ・・・？練習のときだけ、言う事を聞いている振りをして・・・本番でこんな無茶するようじゃ・・・練習の意味・・・ないじゃない・・・」

言葉と共になのはから漂ってくる殺気にスバルとティアナはただ・・・うろたえる事しか出来ない。なのははティアナのほうに顔を向け、続けた。

「ちゃんとさ・・・練習どおりにやろうよ。・・・私の言ってる事・・・

訓練、そんなに間違ってる？」

「・・・くっ・・・私はッ！！！」

ティアナはなのはから目を背けると、なのはから距離をとりクロ

スミラージユを構える。

「誰も傷つけないから・・・」

そう言いながらカートリッジをロードする。どうやら砲撃を行うようだ。

「なくしたくないから・・・！だから・・・だから強くなりたいんですッ！！！」

叫ぶティアナ。その目には涙が溜まっていた。その思いがあふれ出しているのだろう。だが・・・、

「少し・・・頭を冷やそうか・・・」

なのははそう言っていると、人差し指をティアナに向ける。その周りには魔力弾が生成されていた。

「フアントムブレ・クロスファイア・・・シュート」！？」  
ドガアッ！！！！

ティアナが砲撃を出す前になのはのクロスファイアが打ち抜いた。  
「ティアッ！！・・・これは・・・バインド」

スバルがティアナを助けに行こうとするが、なのはにバインドで止められてしまうのだった。

「おい！あのままじゃティアナがやばいぞ！早く助けにいかねーと・・・行くぞ、ヘル！」

それを見ていた陸は、ヘルに融合するように促すが・・・、  
『駄目だ』

「はぁ！？何だよ！」

断られる。それに対し怒鳴りながら問う陸。だが、ヘルは答えようともしなかった。

「だんまりかよ・・・もういい！俺だけで行くッ！！！！」

そんなヘルに腹を立て、陸はビルからウィングロードへと飛び移ると、なのはの元へ走って行った。そして・・・、

「じつとして・・・スバル、よく見てなさ・・・」

「ちよつと待ったッ！」

ティアナに止めを刺そうとしていたなのはを止める。

「邪魔しないでくれる……？陸君……」

「邪魔するも何も……、こんなの教導なんかじゃねーだろーが！  
！」

なのは放つ殺気に動じることなく、陸は叫んだ。

「確かにティアナのやった事はいけないことだと思っさ……、だ  
けど……それを暴力でやるうなんて……おかしいだろ！？注意  
すればいいだろうが！」

「なら……私の邪魔をする……ってことで良いんだね？」

だが、陸の叫びもなのは届かず、なのは足元に魔法陣が展開  
される。どうやら陸を排除するつもりである。

「聞く耳持たずかよ……、ってうわ！？」

そう呟く陸の足元に魔力弾が炸裂。何とか体制を立て直そうとす  
るも、バランスを崩し、そのままウィングロードから落ちてしまう。  
その時だった。

『陸ッ！！！！』

叫びと共に、ヘルが飛んできた。とつさに陸はヘルを掴むと、顔  
面に押し当てる。そして融合を果たし、地面に降りた。

「さつき、俺との融合を拒否したくせに今更どういう風の吹き回し  
だ、ヘル？」

『貴様に死んでもらっては困るのでな……』

ジト目でヘルに問う陸に、ヘルはため息をつきながら答えた。そ  
こへ……、

「ヘルさんも邪魔をするのですね……」

『全く、貴様がでしゃばった所為で……我までとばっちりを喰ら  
う事になっただろうが……』

なのは声が聞こえ、ヘルはため息混じりに陸に言う。

「しょうがないだろ……」

そう言っつて、背中からヘルズウィングを展開し、なのはを見上げ  
続ける。

「ヘル、お前がティアナをどう思ってるのか知らねえ、俺だっつてテ

イアナのやった事はやっちゃいけない事だつても分かつてる・・・  
。だけどな・・・注意もしないで、暴力でやるうとするのは気に入く  
わねえんだよ」

そう言つて、近くにあつた鉄パイプを手にする陸。そんな陸に、  
ヘルはこのお人好しめ。と呟く。

『だが、こうなつてしまつた以上、致しかたあるまい・・・行くぞ  
陸！！！！』

「ああ！」

そう言つと、陸は空へと飛び上がる。

こうして、魔神『平良陸』と不屈のエースオブエース『高町なのは』の戦いは幕を開けたのだつた。果たしてこの戦いの行方はどうなるのか・・・？それは誰にも分からない。

L e t , s G o t o t h e N E X T S T A G E . . .

## チャプター7「激突する想い」（後書き）

いかがだったでしょうか？

ティアナの過去や、魔王降臨の描写・・・あってますかねえ（汗）  
何せ少しうる覚えなもので・・・（オイ作者）そしてそれを止める  
ために、我等が陸君が魔王様に戦いを挑む事に・・・、一体どうな  
るのか・・・それは作者にも分かりません（待てる）・・・そんな  
冗談はさておき、次回は新必殺技も出す予定ですので楽しみに待っ  
ていてください。

それでは（owo）ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7383/>

---

魔法少女リリカルなのはSplatterS

2010年11月17日14時10分発行